



平成 28 年 7 月 5 日

国際審判員 松田 雅彦
(神奈川県ボート協会)

2016 World Rowing Cup III **(17th, Jun, – 19th, Jun, 2016 Poznan, Poland)**

I. はじめに

2016 年 6 月 17 日(金)から 6 月 19 日(日)に Poznan, Poland で開催されました World Rowing Cup III に国際審判員として参加致しましたので、審判業務及び大会概要に就きまして報告申し上げます。

6 月 15 日(水) 11 時 40 分成田発、16 時 05 分コペンハーゲン着後、乗換、22 時 50 分コペンハーゲン発、翌 16 日 00 時 01 分ポズナン空港に到着した。時差は約 7 時間。コペンハーゲン空港では案内の表示に日本語、韓国語、中国語で記載されたものがあり便利であった。この 3 か国からの渡航者が多いという事であろう。

ポズナン空港では現地 OC の方の出迎えがあり宿泊ホテルに到着したが、ホテルマンによると予定されていたホテルは満室の為、初日だけ別のホテルの宿泊になるとの事。タクシーを手配され問題無く別のホテルに送迎され、翌朝、再度予定されていたホテルに手配されたタクシーで戻り、取り敢えずスーツケースのみフロントに預けコースに向かった。



空港内カウンター

ホテル内の Information

よくある事だが臨機応変に対応する事も必要だろう。唯、約 20 時間の渡航で夜中に到着した者にとっては辛いものがある。結局就寝は明け方となった。

ホテル内に大会に関する情報が掲示されており、Jury Member は 11 時 30 分に判定塔の下に集合とあった。Accreditation はコースに入る手前の建物内にある。掲示板にも場所の記載があったので迷う事無く ID カード、食事のクーポン券等を貰う事が出来た。当然の事であるが中身は確認する必要がある。小生に渡された分には当日の Lunch クーポンが入っていなかったもので、その場で指摘し事無き得た。



Accreditation

今大会もそうだが、コース及び建物内（特に FISA Office）は ID カードのチェックが厳重であった。

ポーランドの正式名称はポーランド共和国、人口約 3211 万人、2004 年に EU に加盟したが通貨はズウォティを使用している。日本の銀行はズウォティの在庫は限られており、特定の外資系銀行では比較的換金し易い。

言語はポーランド語であるが歴史的にドイツとロシアに侵略を受けてきた事もあり、ドイツ語、ロシア語も通じやすいとの事。

ポズナンは古くからワルシャワとベルリンを結ぶ東西交易の中継都市として栄え、現在でも商業都市として発展を遂げ、ポーランド第 3 の都市として国内最大のメッセが毎年開催されている。

空き時間にポズナン市街地を歩き回ったが、街並みはヨーロッパ風と言えるが古い町並みと近代化された建物を入り混じるといったものだった。



ポズナン市街地

大会が開催されている Lake Malta は Poznan 駅から車で約 20 分の場所にあり立地条件は良い。大会関係者は全て定時運行されている貸切バスで移動であった。概ね朝夕は 30 分毎に運行されており比較的時間に正確であった。



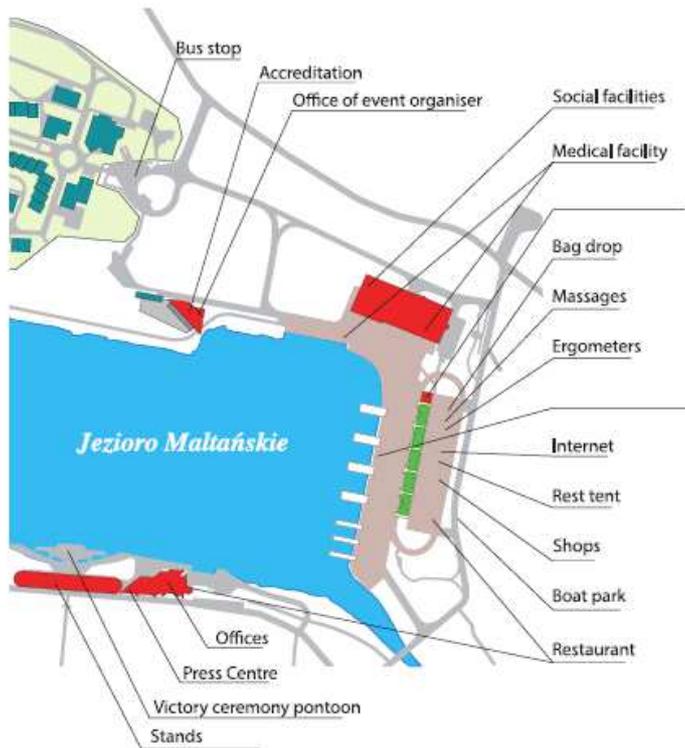
貸切バス

DIRECTIONS TO THE REGATTA VENUE IN POZNAN



※Lake, Malta Poznan の位置

MAP OF THE REGATTA VENUE IN POZNAN



II.大会概要

1. 大会日程

- 6月15日(水) Official Training
- 6月16日(木) Jury, Team Manager's Meeting & Draw / Para Rowing Heat
- 6月17日(金) Heats & Repechages
- 6月18日(土) Semifinals, International and Para-Rowing events Finals
- 6月19日(日) Finals B & A

※今大会は Para Rowing も開催された。

大会は09時00分頃から19時30分頃まで行われ、Para Rowingは健常者レース終了後、18時00分頃から行われた。

Para Rowingは1000mで開催されるので、Para RowingのFinishは1000m地点である。その為、Judge at FinishはPara Rowing時は1000m地点に移動する。この辺りは北緯約52度(日本は北緯約35度)の為、この時期は日照時間

が長く、日出は 04 時 00 分頃、日没は 21 時 00 分頃。

2. コース

Lake Malta Regatta Course



コースは 2000m 、0 レーンから 7 レーンの合計 8 レーンあり、レースは 1 レーンから 6 レーンまでで行われた。それらプラス スタートに向かうレーン及び Cool Down レーンがある。

40 年以上の歴史がある人工湖で上流、下流にそれぞれ水門があり循環は可能である。流れは殆ど無い。周囲はサイクリングロードとなっており自転車による伴走も可能となっている。周囲は総合運動公園とされており、屋外プール、サマースキー、遊技場、キャンプ、結婚式場まで設備されている。大会期間中にも 1 組の結婚式が開催されていた。

3、参加国 / エントリークルー数 / エントリー人数

合計 44 カ国、276 クルー、584 名の参加

4. 種目

①World Cup III

LM1X・M1X・LM2X・M2X・LM2-・M2-・LM4-・M4-・LM4X・M4X・
M8+

LW1X・W1X・LW2X・W2X・W2-・W4X・W4-・W8+

②Para-Rowing Events

ASM1X・
ASW1X
TAMIX2X
LTAMix2X・LTAMix4+

用語の説明

AS : 腕のみを使用。
TA : 上体、腕を使用。
LTA : 脚、状態、腕を使用。

- ・ AS/TA 種目はストラップで各々の部位が固定されているかどうかを確認する。
- ・ 安全の為、Para Rowing Crew の出艇・帰艇棧橋は健常者クルーと分けられていた。
- ・ Zonal Umpiring ではなく通常の主審の場合、主審艇に余裕があれば2艇で遂行する。
- ・ 視覚障害者の為、発艇で赤ランプを点灯と同時に「Red Flag」と発声しスタートボタンを押す。ゴール後、レース成立の白旗を掲げたと同時に「White Flag」と発声し、白旗を掲げる。
- ・ 艇計量は健常者レースと同様にランダムに指定し行う。

5. 参加審判員

Jury Members (12ヶ国 合計19名)	NFS	Lic No.
① Wolny Marszalek Marta (P.Jury)	POL	1132
② Blandford-Baker Mark	GBR	1409
③ Boensnes Per	NOR	1032
④ De Mattos Gilberto	BRA	1509
⑤ Fuentes Castaneda Santiago	MEX	1366
⑥ Ghorab Amar	ALG	1526
⑦ Karajovic Ibrocic Ruzica	SRB	1428
⑧ Karczewski Maciej	POL	1544
⑨ Koba Andrzej	POL	1130
⑩ Krupinski Adam	POL	1645
⑪ Kuczma Monika	POL	1545
⑫ Matsuda Masahiko	JPN	1614
⑬ Molly Markus	NZL	1413

⑭	Nosal Zbigniew	POL	1131
⑮	Pawlak Kubasek Malgorzata	POL	1618
⑯	Saygel Burce	TUR	1675
⑰	Schuster Karin	AUT	1621
⑱	Warnke Rolf	GER	1723
⑲	Widun Anna	POL	1619

※基本的には英語での会話となるが、アルジェリアの審判員は英語よりフランス語の方が理解しやすいとの事であったので、彼にはフランス語で話された。



Jury Member

6. 審判業務

① 部署配置 (小生)

- Jun, 16th : Athlete Weighing
- Jun, 17th : Res.Judge at Finish / Umpire 5
- Jun, 18th : Judge at Start / Control Commission (In)
- Jun, 19th : Control Commission (In)

尚、各部署の人員は以下の通り。ITO は国際審判員、NTO は国内審判員。

- a) Starter(発艇) ITO 2 人、NTO 1 人
- b) Judge at Start (線審) ITO 1 人、NTO 1 人
- c) Umpire(主審 審判艇は 6 艇) ITO 1 人、Driver 1 人
- d) Judge at Finish (判定) ITO 2 人、NTO 2 人

- | | |
|---------------------------|-------------------------------------|
| e) Control Commission(監視) | ITO 6 人、NTO 7 人
(Resp./ Out/ In) |
| f) Boat Weighing(艇計量) | ITO 1 人、NTO 2 人 |
| g) Athlete Weighing(選手計量) | ITO 1 人、NTO 1 人 |

②業務に関して

・ Team Manger Meeting

大会前日 6 月 16 日 (木) 13 時 30 分よりコース確認、15 時 00 分から Team Manager Meeting, 16 時 00 分から Jury Meeting が開催された。

参加クルーの確認、Progression System の確認、抽選が行われた。翌日 17 日 (金) は暴風雷雨が予報されている事が説明され、状況によりレースを遅らせる、Round を cut する可能性がある事が説明された。



Team Manager Meeting

この日は 18 時 00 分過ぎから Para Rowing の Heat が開催される為、慌ただしい Meeting となった。コース確認では Jury Member が確認したのはコースを横目に見ながら車で発艇まで行き、発艇台内部のみであった。このコースの経験者が多いからであると思うが、初めての場合は可能な限り早目に来てコースを視察する事も必要であろう。

初日の Para Rowing の Cox 計量であった。Para Rowing の Cox は性別の指定は無い。その為、Cox の体重は男性も女性の体重制限 (50kg) が適用される。これは FISA Rule Appendix 13 Regulation 4 Coxwains に明記されている。この規定は 2013 年に制定されたもので、以前は性別毎の体重で計測していた。計量担当 NTO はこの改定を知らなかったので、小生から FISA Rule を説明し理解してもらった。

又、D/W 用に砂及び数枚の袋が用意されていたが、計量所の外に置かれていた。(そもそも D/W を作るつもりは無い様であった) 結果として今大会は D/W

が必要なクルーは無かった



Athlete Weighing

Para Rowing の第 1 レース、第 2 レースではシグナル発艇に不具合があり、**Start** は発艇旗で行われた。然し乍、発艇台の日差しで発艇旗が見えず、発艇にトラブルがあった。レースは成立されたが、シグナル発艇に慣れ、日差しで発艇旗が見えなくなる事に気付かなかった様である。国際大会で発艇旗によるトラブルは 2 回目である。(過去の 1 回は再レースとなった) 定期的に発艇旗でスタートの訓練をすればこのようなトラブルも防げるのだが。

今大会では I-Pad ではなく Photo book で行われた。Photo Book は 1 冊に全クルー分が入っており NTO が手慣れた様子で棧橋に来たクルーのものを抜き取って確認していた。又、Boat Weighing 対象クルーも NTO が把握しており、ITO と連携しながらボランティアを使い適切に艇計量所に誘導した。

大会 2 日目 17 日(金)は予報通り荒天なり、暴風雨の中レースは行われたが、雷が鳴り一時中断した。前日の Team Manger Meeting で天候悪化の件は既に各国に連絡されており、天候状況によっては中断する事、又、Rule に従い、Round を Cancel する可能性がある事を示唆した。

Poznan の日没は 21 時 00 分以降である為、天候回復を待つレースは 17 時 30 分に再開した。だが、Preliminary レースは全て Cancel された。

唯、FISA Executive Commi では一度 Cancel と指示されたレースが 10 分後に撤回されるという事態があった。FISA Executive Commi 内でも出来る限りレースを行いたい意向が窺える。

今大会もテレビ放映に備え、Advertising を厳格にチェックする様 Control Commission に指示が有った。Advertising の指導者として FISA Commission

Member Mr.Nick Hunter 氏が Outponton に待機していた。規定に従っていない場合、艇には Masking され、ユニフォームに違反があった場合は、大会が用意した Masking 用のビブスを着用した。以下の写真は規定違反の為ビブスを着せられたイギリスクルー。



・ Zonal Umpiring

Heat、Repechage、Semi Final は Zonal Umpiring (定められた Zone を担当する主審)で行った。約 400m 間隔でレースをゼロレーンで監視する。必要に応じてコース内に入り対処する。今大会は 5 分間隔で行われた為、波を立てない事は効果があったと思料する。全艇が担当 Zone を通過した後、Zone を担当する主審はコース中央付近まで行き、レース通過を確認後、ゼロレーンに戻る。白旗は揚げない。

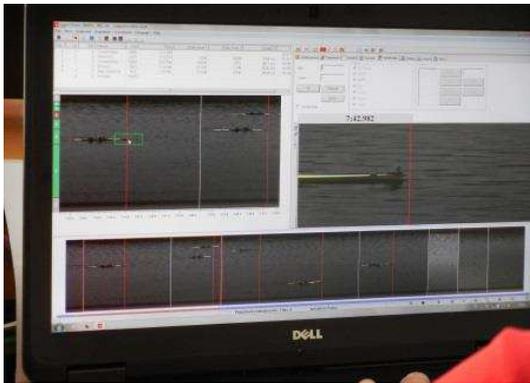
2000m を 5 分間隔で行う事であるが、今大会に出漕するレベルのクルーであると接触の危険も無く、問題無く遂行出来るが、技量に不安のあるクルーが出漕する大会であるところの時間間隔では危ういだろう。

・ 判定 (Judge at Finish)

判定では ITO が 2 名配置され、Res. Judge at Finish は画面を見て着順を確認する。判定員(ITO)と NTO が目視で着順確認、ブザー、白旗掲示を担当する。

判定長は中間タイムを確認し、ゴール後、計測システム担当者が操作する画面を見て着順を確認する。(Bow Number が大きく表示される) 着順表の内容を確認し、問題無ければ “Official” と発声し着順を確定させる。

※判定塔内



画面での着順確認

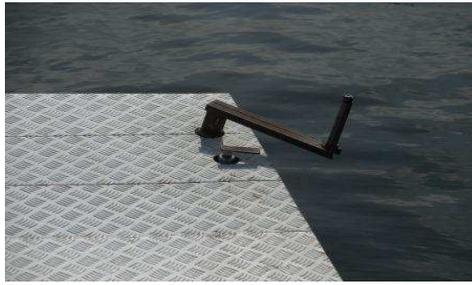


Finish Tower



Finish Area

• Start Pontoon



Boat Holder は 1 名で行う。上の写真の通り、Boat Holder が寝そべる場所の右側にハンドルがありそれを片手で回す事により Pontoon を前後に動かす。Boat Holder は片手で艇を掴み、片手でハンドルを回して艇揃えを行っていた。因みに今大会 P.Jury Ms.Marta (POL)は「Boat Keeper」と呼んでいた。各国によって呼び方はあるのだろう。

III. 陸上施設等に関して

- ・発艇、線審、判定等のシステムは Swiss Timing 社が行っていた。
- ・今大会では NTO は約 20 名召集されており、それ以外でボランティアの学生（ボート部）が多数参加していた。
- ・Para Rowing 開催の為ではあるが、施設内は出来る限り段差を無くし、Para Rowing 出漕者に配慮されていた。
- ・Umpore Boats は 8 艇用意され、救助艇、TV カメラ艇、水上バイク等合わせて 10 艇程用意され万全の体制が整えられていた。今大会は Rough Condition による沈があったが、救助艇による迅速な救助が為されていた。
- ・艇は全て屋外の可動式アームに置かれた。ヨーロッパの国々はトレーラーに艇を積み込み自家用車で牽引している。レース終了後は再度積み込みし、すぐに帰途についていた。



艇置場

- ・コース全般をカバーする Wi-Fi が設備されていたが、繋がりにくい様であった。

- ・ 棧橋でのクルーの靴は、現地ボランティアが以下の籠にクルー毎に纏めて整理されていた。



IV. Nations Dinner

6月18日（土）夜に Nations Dinner が開催された。恒例の晩餐会で参加各国の代表者及び FISA 役員、Jury が招待される。形式は様々で立食であったりもするが、今回は着席スタイルとなった。Poland Rowing 協会会長、FISA 会長、FISA 審判長等の挨拶があり、参加国へ記念品の贈呈が行われた。日本から細淵氏、日浦氏、小生の3名が招待されており、誰が記念品を受け取るかと話していたが、贈呈される国は大会に出漕した国である為、出漕していない日本に記念品は無かった。



中央は FISA 会長 Mr.Jean-Christophe Rolland 氏
右は FISA 審判長 Mr.Patrick Rombaut 氏

V. 各写真



Start



Start Tower



Course



Steering Aids



Judge at Start



Start Line



Start Area



Judge at Start



Yellow / Red Mark



Boat Weighing



Pontoon



各国の国旗



表彰台



Umpire Boats



Bow Number 配布場所



Ergo 練習場



Lunch カフェテリア

VI. 終わりに

ポズナンでは頻繁に FISA 大会が開催されている事もあり、現地は大会運営に手慣れている事を強く感じた。本年も 3 回の国際大会が開催されるとの事。開催される大会数が多くノウハウが蓄積される有利な点が多く、役割分担され部門毎に熟練者を配置している事も大会を成功させる重要な要因であろう。

審判業務ではきめ細かいサポートが出来る NTO の重要さを改めて実感した。大会期間中、各審判部著には専任の NTO が配置されており、非常に頼りになった。上述の通り一部 Rule 改訂を知らない場合があったが、それは ITO が適切に指導する事である。今回の経験を国内審判業務及び今後の国内での国際大会での業務に生かせる様努力する所存である。又、日本の審判団が行っている All Japan で審判業務に統一性を持たせ、業務の改善を考える研修制度は世界に誇るべきものであり、信頼される要因である事を改めて認識した。

今大会には日本から FISA Event Promotion Commission 細淵 雅邦氏及び Sports Medicine Commission 日浦 幹夫氏が参加された。Nations dinner では御二方の人脈の広さが窺えた。積極的な活動が FISA 上層部からも信頼を得る事に繋がるのであろう。余談であるが、帰国の便はポツナン空港からコペンハーゲン空港を乗り継いだのだが、乗継時間は 1 時間しかない。この様な時は定刻通りにいかないだろうと予想していた通り、ポツナン空港の出発が約 30 分遅れ、コペンハーゲン空港をほぼ端から端まで早歩きで歩く事になった。(約 1km) 同じ航空会社なので多少であれば待つだろうとは思いつつ、税関審査が空いていた事も幸いし、出発定刻 5 分前に搭乗した。小生が最後の搭乗者であった様だ。不慣れな場所では時間に余裕を持って行動すべきだろう。最後になりましたが、本大会に派遣させて頂きました事に就きまして、日本ボート協会 上野審判委員長、千田国際委員長、相浦事務局長、事務局審判担当 竹内様、事務局国際担当 藤田様に心より感謝を申し上げます。

以上